

比恵尻遺跡

福岡県春日市桜ヶ丘所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第60集

2011

春日市教育委員会

比 恵 尻 遺 跡

福岡県春日市桜ヶ丘所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第60集

2 0 1 1

春 日 市 教 育 委 員 会

序

本市の中央部に南北方向にのびる春日丘陵とその周辺の一帯には、多くの遺跡が確認されています。特に弥生時代の遺跡は、須玖岡本遺跡を中核として濃密な分布を示しており、その範囲は南北2 km、東西1 kmに達することがわかっています。この遺跡群は須玖遺跡群と呼ばれ、出土する青銅器や青銅器鑄型の質や量は他を傑出するため、奴国の王都とされています。

ここに報告いたします比恵尻遺跡（1次調査）は、須玖遺跡群の北端付近に位置する遺跡で、平成20年度に新たに発見されました。発見から日が浅いため詳細については不明ですが、周辺には重要な遺跡が広がり、今回の調査でも弥生時代の青銅器鑄型や、中世の円形銅製品が出土するため、今後の調査が楽しみな遺跡でもあります。

貴重な遺跡の発掘調査報告としましては、本書の不十分さは免れませんが、研究資料として未永く活用され、また、一般の方々にも広く利用していただければ幸いです。

なお、最後になりましたが、発掘調査に際しまして、御協力、御指導を賜りました方々に心から感謝の意を表します。

平成23年3月31日

春日市教育委員会

教育長 山本直俊

例 言

1. 本書は、2008年6月24日から7月10日にかけて春日市教育委員会が実施した、共同住宅建築に伴う比恵尻遺跡1次調査の緊急発掘調査の報告書である。
2. 遺構の実測は、井上義也が行い、製図は牧平佳恵・伊東ひかりが行った。
3. 遺物の図作成は、井上・吉富千春・牧野幸子・齊藤礼（現筑紫野市教育委員会）製図は井上・吉富が行った。
4. 掲載写真のうち遺構については井上、空中写真企画が撮影し、遺物については岡紀久夫（文化財写真工房）が行った。
5. 本書に使用した2万5千分の1地形図は、国土地理院発行の『福岡南部』である。
6. 本書の遺構実測図に用いた方位は、座標北である。
7. 本遺跡出土の銅製品については、市元豊氏（九州国立博物館）小田富士雄氏（福岡大学）志賀智史氏（九州国立博物館）南健太郎氏（宮崎県埋蔵文化財センター）の御教示を得た。特に南氏からは文献の訳について御協力いただいた。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の組織	1
II	位置と環境	2
III	調査の内容	5
1	調査の概要	5
2	遺構	6
(1)	土坑	6
(2)	ピット	10
3	遺物	12
(1)	土器	12
(2)	土製品	13
(3)	石器	13
(4)	青銅器鑄型	14
(5)	円形銅製品	14
IV	まとめ	16

図版目次

図版 1	(1)	比恵尻遺跡全景（北西から）
	(2)	比恵尻遺跡全景
図版 2	(1)	1・2・4・5・6号土坑
	(2)	3・7号土坑
図版 3	(1)	3・8号土坑
	(2)	1号土坑断面土層（北西から）
	(3)	1号土坑（南西から）
図版 4	(1)	2号土坑鋳型出土状態
	(2)	3号土坑円形銅製品出土状態
	(3)	4号土坑土製品出土状態
図版 5	(1)	土器
	(2)	土製品
図版 6	(1)	石器
	(2)	青銅器鋳型
	(3)	円形銅製品

挿図目次

第1図	比恵尻遺跡周辺遺跡分布図	3
第2図	比恵尻遺跡位置図	4
第3図	比恵尻遺跡遺構配置図	6
第4図	1号土坑実測図	7
第5図	2号土坑実測図	8
第6図	3・4号土坑実測図	9
第7図	5号土坑実測図	10
第8図	6・7号土坑実測図	11
第9図	8号土坑実測図	12
第10図	土器実測図	13
第11図	土製品実測図	13
第12図	石器・鋳型・銅製品実測図	15

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成20年6月5日、桜ヶ丘5丁目1番に共同住宅建設計画の打診を受けた。当地は周知の埋蔵文化財包蔵地には含まれていなかったが、周辺には須玖唐梨遺跡、須玖五反田遺跡、須玖楠町遺跡等の重要遺跡が確認されており、開発面積が594㎡と広がったことに加え、近接地の調査歴が少なかったことから同10日に試掘調査を実施した。重機により表土を除去したところ、地表面から約1mで遺構を確認した。

このため地権者と春日市教育委員会で埋蔵文化財保護に関する協議を行い、遺構が確認された対象地の南側120.7㎡を中心に発掘調査を行うこととなった。地権者と春日市との間に発掘調査に関する受託契約を締結し、発掘調査は開発事業者の費用負担において、平成20年6月24日から7月10日まで行った。

2. 調査の組織

発掘調査及び整理作業における調査体制は下記のとおりである。

発掘調査（平成20年度）				報告書作成（平成22年度）			
教育長		山本	直俊	教育長		山本	直俊
社会教育部長		簗原	三郎	社会教育部長		古賀	俊光
文化財課長		古賀	俊光	文化財課長		西尾	純司
管理担当	課長補佐	白水	心子	管理担当	統括係長	居石	正明
	主査	塩足	雅弘		主査	福岡	義彦
	主事	山田	ひとみ		主事	山田	ひとみ
					主事	佐伯	廣宣（7月～）
文化財担当	係長	平田	定幸	文化財担当	課長補佐	平田	定幸
	主査	吉田	佳広		主査	中村	昇平
	主査	森井	千賀子		主査	吉田	佳広
	主任	井上	義也		主任	井上	義也
	嘱託	吉田	浩之		嘱託	牧野	幸子
	嘱託	長谷部	真弓		嘱託	柳	智子
					嘱託	松田	千恵（～6月）
					嘱託	上原	あい（7月～）

II 位置と環境

比恵尻遺跡は、福岡県春日市桜ヶ丘5丁目に確認された遺跡で、今回の1次調査地は桜ヶ丘5丁目1番である。

博多湾に面した福岡平野は、那珂川と御笠川が北流する沖積平野であり、この両川に挟まれた丘陵部や周辺の台地には多くの遺跡が確認されている。特に弥生時代の遺跡は、板付遺跡、比恵・那珂遺跡群、井尻B遺跡群、須玖遺跡群等の大規模な遺跡が確認されており、中国の史書に記された奴国の故地に比定されている。

春日市はこの平野の南部に位置する面積14.15km²の都市である。春日市のほぼ中央には、南方の脊振山系から派生した春日丘陵が南北にのび、その北部を中心に数多くの遺跡が連続して確認されている。特に弥生時代の遺跡は濃密で、その範囲は南北2km、東西1kmに及ぶことが、発掘調査や確認調査等の成果から明らかになっている。この遺跡群を須玖遺跡群と呼称しており、奴国の中心遺跡であることは、遺構、遺物の質や量から間違いない。

また、須玖遺跡群の東西の台地上にも、空閑地を挟んでまとまった遺跡が確認されている。以上のように春日市では、北部を中心に多くの遺跡が確認されており、その総数は約150にも及ぶ。遺跡の時期は弥生時代が主体をなすが、旧石器時代から近世までの遺物、遺構も確認されている。

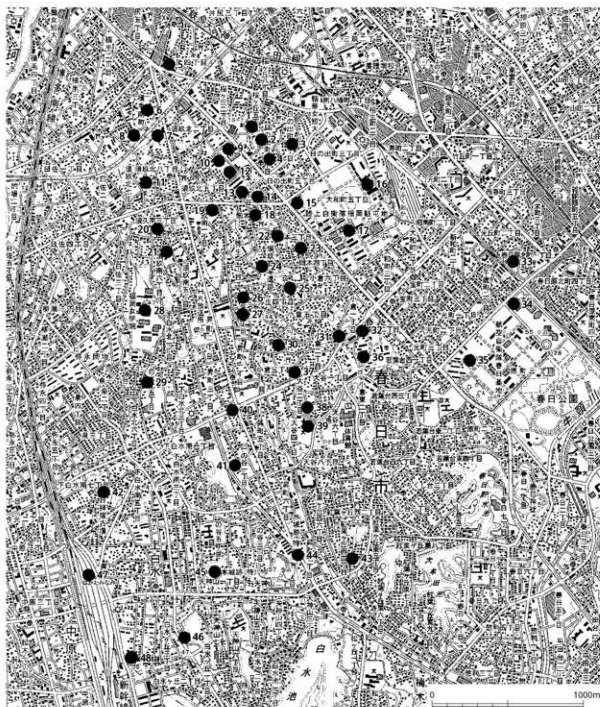
旧石器時代の遺物は市内十数ヶ所で確認できる。各遺跡から出土する旧石器は、ほとんどが再堆積したもので、市西部の門田遺跡のように文化層として確認できた例は極まれである。縄文時代の遺構は、同じく西部の原遺跡、柏田遺跡などで住居跡や石組遺構が確認されているほか、陥穴状遺構が市東部でも確認されている。

上述したように弥生時代には多くの遺跡が確認されているが、爆発的に遺跡数が増加するのは中期前半以降である。この傾向は弥生時代終末まで続き、弥生時代中期前半以降は須玖遺跡群が福岡平野の中心的な遺跡であったことは間違いない。

しかし、古墳時代には当遺跡に近接する須玖黒田遺跡や須玖楠町遺跡でも前期の集落跡が調査されているが、全体的に弥生時代と比べ、住居跡等の遺構の数が減少する。ただし、市域西側の台地上には御陵古墳、野藤1号墳、下白水大塚古墳、日拜塚古墳等の前期から後期の前方後円墳が造営されている。

古代には、集落跡のほか、大宰府の西門から鴻臚館へと通じる官道が先の原・春日公園内遺跡で検出されている。また、市の南部では大土居水城跡、天神山水城跡、須惠器窯跡である浦ノ原窯跡群や惣利窯跡等が認められ、古代寺院に瓦を供給したと考えられるウトグチ瓦窯跡も確認されている。

中世には、西部の中白水遺跡で上白水館跡が調査されており、北部の野藤遺跡周辺や須玖岡本遺跡でもまとまった遺構が明らかになる可能性がある。なお、文献には下白水北に天浦城があったと記されており関連遺構の検出が待たれる。



- | | | | |
|------------------|--------------------|----------------|------------|
| 1 比恵尻遺跡 | 2 須玖桶町遺跡 | 3 須玖黒田遺跡 | 4 須玖永田A遺跡 |
| 5 井尻B遺跡 | 6 横手遺跡 | 7 御陵遺跡 | 8 笠接遺跡 |
| 9 須玖磨梨遺跡 | 10 智者ヶ本遺跡 | 11 野藤遺跡 | 12 須玖五反田遺跡 |
| 13 須玖坂本B遺跡 | 14 須玖岡本遺跡坂本地区 | 15 須玖尾花町遺跡 | 16 下大荒遺跡 |
| 17 上平田・天田遺跡 | 18 須玖岡本遺跡王墓地点 | 19 須玖タカウタ遺跡 | 20 浦田遺跡 |
| 21 林添遺跡 | 22 須玖盤石遺跡 | 23 岡本ノ辻遺跡 | 24 平若A遺跡 |
| 25 平若C遺跡 | 26 赤井手遺跡・赤井手古墳 | 27 竹ヶ本遺跡・竹ヶ本古墳 | 28 弥永原遺跡群 |
| 29 下ノ原遺跡・下白水大塚古墳 | 30 西方遺跡 | 31 仁王手A遺跡 | 32 伯玄社遺跡 |
| 33 中ノ原遺跡 | 34 原町遺跡 | 35 立石遺跡 | 36 松添遺跡 |
| 37 大南B遺跡 | 38 大南A遺跡 | 39 大谷遺跡 | 40 宮の下遺跡 |
| 41 一の谷C遺跡 | 42 日拝塚遺跡・日拝塚古墳 | 43 紅葉ヶ丘遺跡 | 44 大土居水城跡 |
| 45 天神山水城跡 | 46 ウトヅチB遺跡・ウトヅチ瓦屋跡 | 47 門田遺跡 | 48 原遺跡 |

第1図 比恵尻遺跡周辺遺跡分布図(1/25,000)

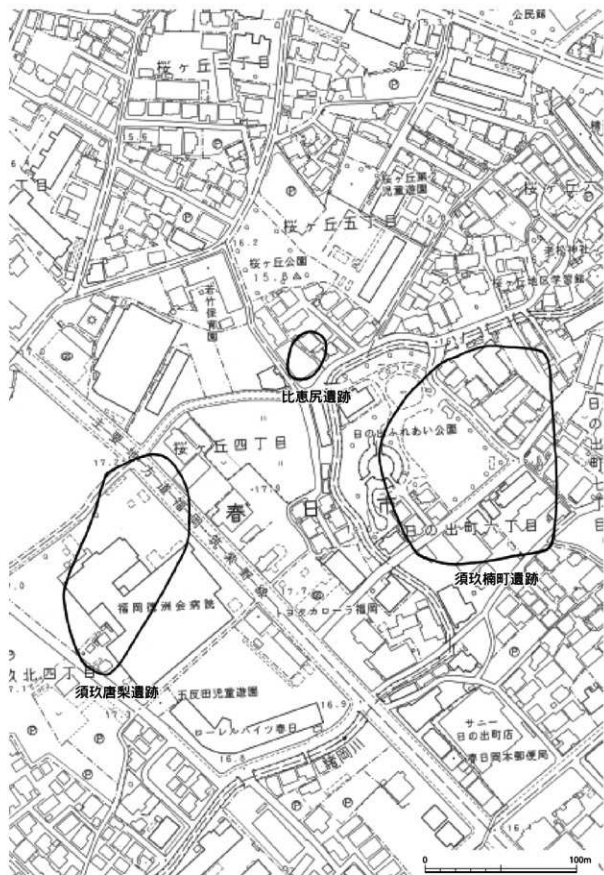


図2 比恵尻遺跡位置図 (1/2 500)

Ⅲ 調査の内容

1. 調査の概要

春日市の中央には、南方の脊振山塊の北東部からのびた春日丘陵が南北方向に突出している。春日丘陵には、小さな谷が入り込んでおり樹枝状の形態をなすが、その北部や周辺には多くの遺跡が途切れることなく確認されている。この遺跡群は弥生時代を主体とするもので、範囲は南北2km、東西1kmに及び須玖遺跡群と呼称している。

当調査地は、須玖遺跡群の北端部に位置し、周辺には須玖唐梨遺跡、須玖楠町遺跡、須玖五反田遺跡、須玖黒田遺跡等弥生時代の青銅器生産に関する重要な遺跡が確認されていた。

しかしながら、当地の周囲は十分な試掘調査が行われておらず、周知の埋蔵文化財包蔵地には含まれてはなかったが、将来的に新たな遺跡が発見される可能性が十分に考えられていた。今回、重機を使用した試掘調査の結果、現地表から1m（標高15m）前後で明灰褐色～黄褐色粘土層に達し、その面に遺構を確認することができた。このため、字名である「比恵尻」から当遺跡を比恵尻遺跡として新たに周知の埋蔵文化財包蔵地として登録した。

発掘調査は、試掘調査の結果等から明確な遺構が確認できた対象地の南側を中心に行った。試掘調査と同様、表土や旧耕作土等を約1m除去すると遺構面に達した。遺構検出面は、西側に向い緩やかに下がる。検出面の上面には部分的に砂礫層が認められ、遺構の中にも砂礫で埋まったものが含まれる。この砂礫層は所謂洪水砂と考えられるが、調査区の一部にしか認められないことから、検出面が削平を受けたことがわかる。洪水砂は、当地のすぐ南側には諸岡川が流れているので、諸岡川の氾濫に由来するものであろう。

検出した遺構は、粘土探掘坑と考えられる土坑とピットである。粘土探掘坑は、土器の胎土等を確保するために良好な粘土を採掘したという性格上、歪な形状をしている。複数の土坑が重なり合ったようにも見えるが、明確な切り合い関係をつかむことはできず、実際に切り合いがあるのかも明らかではない。また、殆どの粘土探掘坑は、地山由来の粘質土・粘土と暗褐色系の粘質土が混ざった土で埋まっており、人為的に埋められたと考えられる。

なお、今回報告するピットの中には、やや大形のものや歪なものも含まれており、粘土探掘坑と考えてよいものがある。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、土製品等土器類のほか、石器、青銅器鋳型片、円形銅製品が土坑を中心に出土した。土器類はほとんどが小片で、著しい磨滅を受けており、周辺の遺跡からの流れ込みである可能性がある。土製品は4・6号土坑を中心に出土しており、何らかの祭祀が行われた可能性がある。鋳型片は2号土坑、円形銅製品は3号土坑から出土した。

2. 遺 構

(1) 土 坑

土坑は、粘土採掘坑と考えられる8基を検出した。ただし、先述したようにピットの中には小形の粘土採掘坑と考えてよいようなものも含まれるため、本来は8基を越す採掘坑が存在したと思われる。1号土坑は砂礫で埋まっていたが、その他の土坑の埋土は、地山である黄褐色粘土、青白色粘土と黒褐色系の粘質土がマール状に混じるものである。

1号土坑（図版2-(1)・3、第4図）

調査区南部で検出し、6号土坑を切る。洪水砂と考えられる砂礫で埋まっていた。平面形は不整形で、規模は2.03×2.65m。段掘りが目立ち、最深部の深さは約60cm。北東部と南西部に小形のピットを有す。なお、底面の地山は砂礫層であった。



第3図 比叻遺跡遺構配置図（1/100）

図示していないが、土師器、黒色土器と思われる土器の小片が出土した。

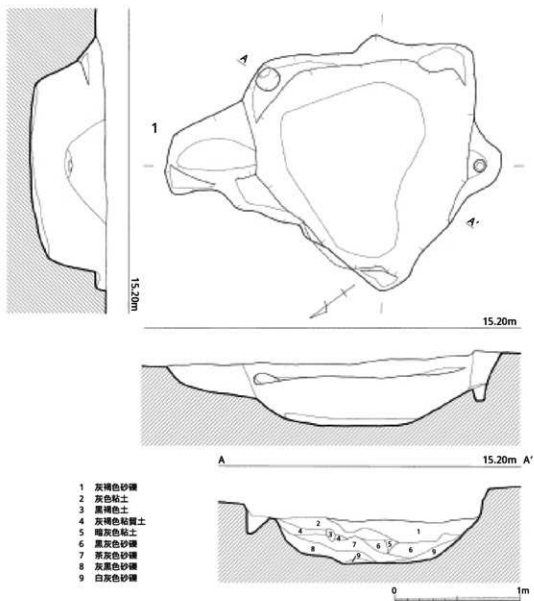
2号土坑（図版2-（1）・4-（1）、第5図）

調査区中央南寄りで検出した。6号土坑との切り合い関係は不明。平面形は、1.27×0.87mの土坑の西側に大形のビットが重複するような形態をなす。2つの異なる土坑の可能性はあるが、切り合い関係が明らかでなく、明確な時期差が考えられないため、1つの土坑と報告しておく。

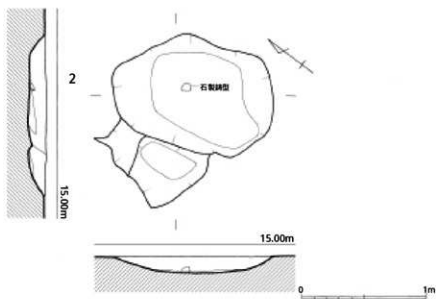
出土遺物は、弥生時代の武器形青銅器鋳型片のほか、図示できないほどの弥生土器と土師器の小片がある。これらの磨滅は著しい。

3号土坑（図版2-（2）・3-（1）・4-（2）、第6図）

調査区中央東寄りで検出した不整形な土坑。特に南側は突出部を持つような形態をなし、北側に比



第4図 1号土坑実測図（1/30）



第5図 2号土坑実測図(1/30)

べ浅い。床面には大小さまざまなピット状の浅い窪みが見られる。

出土遺物は、検出面直下から円形銅製品が出土したほか、図示できなかった弥生土器・土師器・須恵器小片がある。

4号土坑(図版2-(1)・4-(3)、第6図)

調査区西側で検出した不整形な土坑で、長軸1.70m程度、短軸1.30m程度、最深部の深さは20cm程度。北側は短い溝が連結するような形状を呈すが、その先端部からは土製品が出土した。

出土遺物は、ほとんどないが、上述した土製品のほかに、図示できなかった弥生土器や土師器の小片がある。

5号土坑(図版2-(1)、第7図)

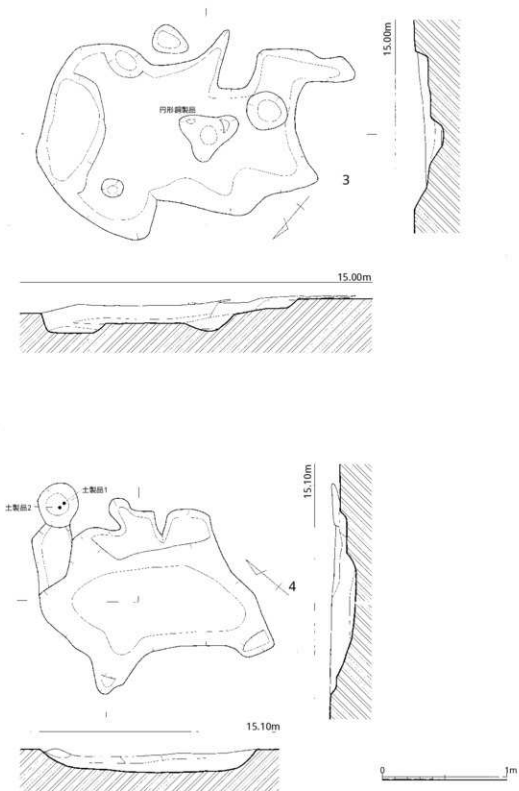
調査区中央北よりで検出した土坑で、北側の一部は攪乱を受ける。深さ50cm程度の掘り込みが重複するようにも見え、床面は青白色の粘土層に達する。壁面は様々な角度で立ち上がるが、北西部はオーバーハングする。

出土遺物として、弥生土器・土師器片等があるが、図示できたものはない。

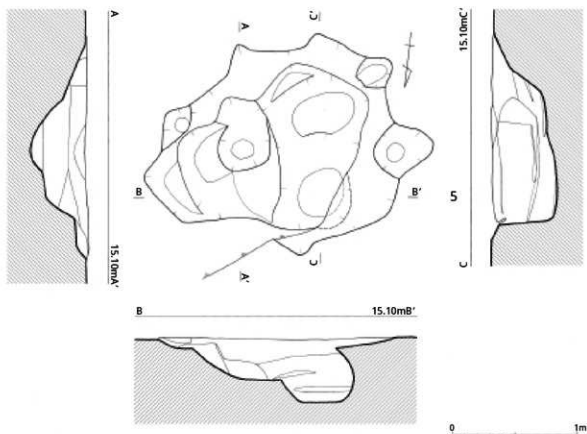
6号土坑(図版2-(1)、第8図)

調査区中央部で検出した土坑で、大小様々な土坑が重複するが、切り合い関係などは確認できなかったため、1つの遺構として取り扱った。規模は南北5.10m、東西4.40m、最深部の深さは45cm程度を測る。

遺物は、多くの土器小片が出土し、上層からは陶磁器片も出土したが、図示できたものは須恵器と土製品である。



第6图 3·4号土坑实测图(1/30)



第7図 5号土坑実測図(1/30)

7号土坑(図版2-(2)、第8図)

調査区の東隅で検出し、長さ4.10m程度を調査した。深さは15cmで、若干の黒色土が混じる地山(青白色粘土、黄褐色粘土)で埋まっていた。

土師器のほか、土器片が出土した。

8号土坑(図版3-(1)、第9図)

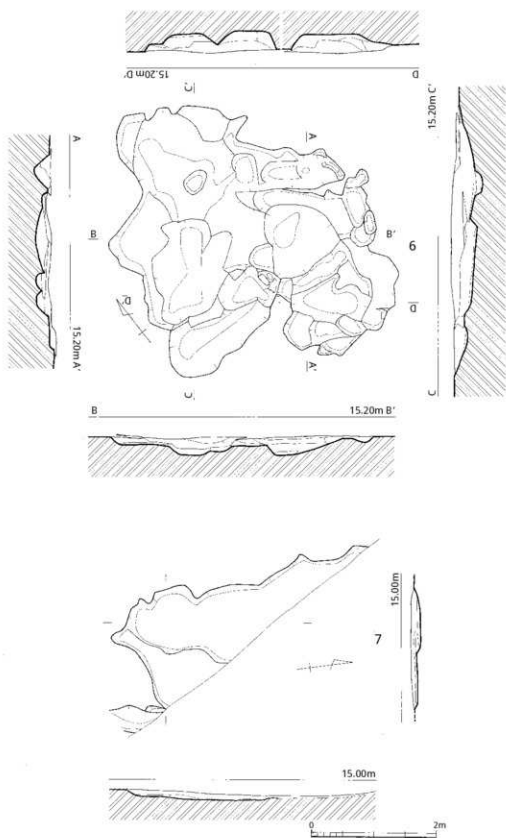
調査区北隅で、長さ4.50mを調査した。深さは30cm程度。7号同様埋土は、粘土質の地山に若干の黒色土が混じるもので、床面は青白色の粘土層に達する。

土器小片が出土するが、図化できるものはなかった。

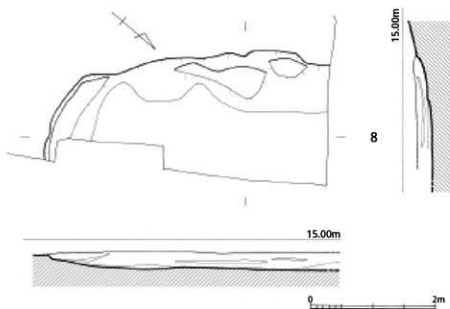
(2) ビット

調査区の南部を中心にビットを検出した。これらの中にはやや大形のものや、歪なものが含まれ、小形の粘土採掘坑ないしは、削られた粘土採掘坑の底面が残存したものと思われる。

各ビットからは、弥生土器、須恵器、土師器等の土器が出土するが、殆どが小片であった。土器の他にも石器が出土している。歴史時代のもので主体をしめると思われるが、覆土の色調や納まり具合から一部に弥生時代-古墳時代のビットが含まれると推定できる。



第8图 6·7号土坑实测图(1/60)



第9図 8号土坑実測図(1/60)

3. 遺物

(1) 土器(図版5-(1)、第10図)

1・2は弥生土器。1は甕の口縁部片で、ビット3から出土した。口縁下に低い断面三角形の突帯を有し、調整は内外面共にヨコナデで仕上げるが、外面にはタキ目が残存する。色調は内外面共に黄白色で、胎土に粗・細砂粒が目立つ。2はビット1から出土した1/4程度が残存する底部資料。平底で、底径を復元すると6.0cmになる。磨滅が著しいが、外面にハケ目が残存する。色調は、外面が暗灰褐色で、内面は淡黒褐色を呈する。胎土には細砂粒が目立つ。

3・4は土師器。3は7号土坑から出土した小形丸底甕で、完形に復元できる。復元口径7.7cm、体部最大径9.0cm、器高9.0cmで、体部最大径は口径を上回る。調整は、外面はハケ目を基本とするが、体部下半は粗いハケ目を施す。内面の調整は体部がヘラケズリ、口縁部は横位のハケ目を施す。色調は、内外面共に暗黄褐色を呈す。胎土は比較的精良だが、細砂粒をわずかに含む。4は6号土坑から出土した椀で、外に開く高台は径6.0cmを測る。磨滅が著しいため、調整は不明。色調は内外面共に黄褐色を呈す。胎土は精良だが、わずかに細砂粒を含む。

5・6は須恵器。5は包含層出土の坏身片で、口縁部が短く内傾する。調整は内外面共にヨコナデを施す。色調は内外面共に暗青灰色、胎土はわずかに細砂粒を含む。6は6号土坑から出土した坏身片で、高台が剥離する。復元口径13.0cm、残器高4.95cmを測る。調整はヨコナデを多用するが、底部は回転ヘラケズリ後ナデか。色調は内外面共に淡灰色、胎土はわずかに砂粒を含む。

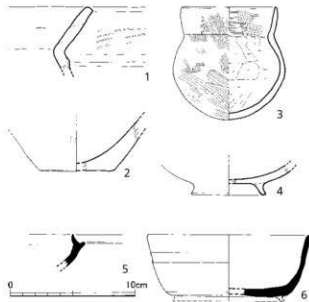
(2) 土製品 (図版5-(2)、第11図)

1・2は4号土坑、3～6は6号土坑、7・8は包含層から出土した。1は鉢形の手捏土器で、口径4.1cm、底径3.8cm、器高3.8cmを測る。

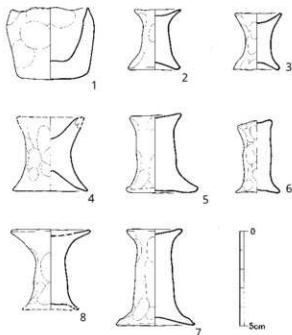
2～8は器台形ないし、支脚形の土製品。2は上面径2.5cm、裾部径2.8cm、器高3.2cmで、上面と下面を窪ませる。3は上面径2.5cm、裾部径2.5cm、器高3.0cmで、上面と下面を窪ませる。4は上面径3.5cm、裾部径4cm、器高3.9cmに復元できる資料で、

中にクビレを有し、上面と下面は強く窪む。5は上面径2.8cm、裾部径3.9cm、器高4.1cm。柱状部は直立し、両端面は殆ど窪まない。6は上面径1.9cm、裾部径2.4cm、器高3.8cmで、両端面は殆ど窪まない。細みな印象のため、支脚形か。7は上面径3.0cm、裾部径4.2cm、器高5.1cm。柱状部が長く、裾部は発達する。上・下面共に窪ませる。8は上面径4.2cm、裾部3.1cm、器高4.2cmに復元できる資料。天地逆になる可能性も考えたが、柱状部から判断して図のように考えた。上面が裾部を上回るため、高環形の可能性がある。

全ての個体は黄褐色～茶褐色を呈し、胎土に1mm程度の砂粒を含む等共通する特徴を有す。



第10図 土器実測図(1/3)



第11図 土製品実測図(1/2)

(3) 石器 (図版6-(1)、第12図)

1は右側縁に刃部を持つスクレーパーで、ビット1から出土した。最大長3.75cm、最大幅2.8cm、最大厚1.1cm、重さ8.3gを測り、縦長剥片の主剥離面からの剥離により刃部を形成している。石材は硬質でキャラメル色を呈し、チャートの可能性がある。旧石器か。

2はビット2から出土した。両側縁を加工する石刃で下端部を欠失する。二次加工剥片とした。最大長2.92cm、最大幅1.73cm、最大厚0.4cm、重さ2.3gを測り、石材は黒曜石。縄文時代の石器か。

(4) 青銅器鑄型 (図版6-2、第12図)

3は弥生時代の武器形青銅器の鑄型で、鋒部から湯口部分。2号土坑から出土した。型は、砥石として再利用されたためか、明瞭な彫り込みは確認できず、中心に向かい緩やかに窪む程度である。また、型の部分は、鑄込みのため黒変する。鑄型は、横断面が蒲鋒状を呈し、裏面、側面は整形時の敲打痕をよく残す。現状の規模は、残存長5.1cm、残存幅5.45cm、厚さ3.15cmを測る。石材は乳白色～黄白色を呈する石英長石斑岩。

(5) 円形銅製品 (図版6-3、第12図)

4は3号土坑の最上層から出土した資料で、厭勝銭、押勝銭や花銭等と呼ばれるまじないや護符として使用される銭。直径6.6cm、厚さ0.2cm程度で、縁は狭く、やや丸身を帯び、肥厚する。中心に直径0.9cmの円孔、縁際に直径0.2cmの小孔を有し、質感は弥生時代の小形仿製鏡に似る。全体の1/2程度しか残存しないが、中国上海市松江に所在する李塔の地宮(地下宮殿)から同種の完形品が2枚出土しており、図上復元(アミ部分)した¹⁾。なお、中国上海出土資料はデザイン、小孔の位置や雰囲気がよく似るが、直径7.4cmと報告されており、当資料よりも一回り大きい。実測は、紐を通し吊るしたと考えられる小孔を上にした。このため、裏面の画像は天地逆になった。

表面は、3つの文様帯からなり、円孔から外側へ内区、中区、外区とする。内区には漢字が陽鑄され、左下から時計回りに「申・酉・戌・亥・子・丑・寅・卯」の8文字が確認できる。欠損部には「辰・巳・午・未」の4文字が復元できる。中区には12個の雷文が配され、外区は12分割され、中に動物像が陽鑄されている。外区の動物像は残存部には7匹が確認でき、内区の漢字と照合すれば、その動物が左下から時計回りに「猿(頭部)・鶏・犬・猪・鼠・牛・虎」であることが分かる。このことから欠損部では「兔・竜・蛇・馬・羊・猿(胴部)」が復元できる。

以上のことから表面の内区、外区は十二支を表現していることは明らかである。十二支は方角や時刻を表すのにも使われ、「子」は北や真夜中の12時を表す。このことから考えても「子」が真上に来るのは自然で、小孔を上にしたことも矛盾がない。

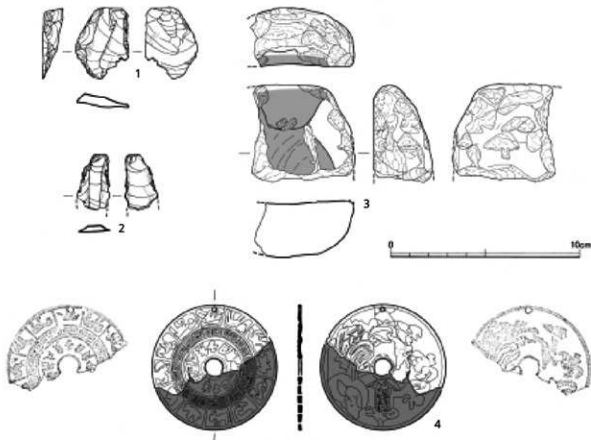
裏面は、人(神)物像あるいは植物などが表現されたと想定していたが、完形品から張天師及び童子図が表現されていることが分かった。上述したように天地逆となっているが、ここでは画像の正位置の状態での記述を行う。上部中央には「張天師」の3文字、その上下には蓮の花が配置される。右側には背を屈めた張天師の立像が表現され、張天師は髭が長く、袖の広い中国服を着ており、両腕を胸の前で曲げている。左側には飛び跳ねる二童子とその周りに雲が表現されている。なお、張天師とは中国、後漢末の道教の一派である五斗米道の創始者張陵の子孫に対する尊称である。

当遺物の類似品が出土した李塔の地宮からは、「天順元年(1457)十二月吉日造」と刻まれた仏像

が出土しており、李塔の建築年代の上限となっている。報告では李塔は明の天順年間（1457～1464）に建造が開始されたとされており、当遺物に関しても15世紀中頃に製作され、日本にもたらされた可能性がある。

註1 復元は下記文献の写真を参考に可能な限りで行った。また、比恵尼遺跡出土品が破損していることとや、写真に写る厭勝銭が正円でないことから一部補正を加え正円に復元した。

上海市文物管理委员会 1999「上海松江李塔明代地宮清理簡報」『文物』総第513期



第12図 石器・銅型・銅製品実測図（1/2）

Ⅳ ま と め

比恵尻遺跡は、平成20年度の試掘調査によって新たに発見された遺跡である。当遺跡は、春日市の北部に広がる低地に立地し、周辺には須玖柿町遺跡、須玖唐梨遺跡、須玖五反田遺跡、須玖黒田遺跡等の弥生時代後期の青銅器・ガラス製品生産遺跡が分布する。

今回の調査で検出した遺構は、ピットの他に8つの土坑がある。発掘調査前は、上述したように弥生時代の青銅器鑄造に関連する遺構の検出を期待したが、報告したように弥生時代の遺構は殆ど確認できなかった。しかしながら、弥生時代の遺物は各遺構や包含層から多数出土している。ただし、その殆どは小片で磨滅を受けたものが多かった。これは当地が地形的に低いことや、すぐ南を諸岡川が流れていることにも起因するものと思われる。実際に遺構検出面の上面や遺構の中には洪水砂で覆われているものもあった。

ピットは遺物が少なく時期の決め手にかけるが、弥生時代～歴史時代に帰属すると推察できる。土坑は規模に大小があり、形態も一定ではない。また、1号土坑を除き人為的に埋められたと考えられる。複数の土坑が切り合ったようなものがあることや、地山が粘土または粘質土であることから粘土採掘坑の可能性が高い。

これらの粘土採掘坑からは、土器の他に青銅器鑄型、土製品、円形銅製品が出土している。青銅器鑄型は2号土坑から出土した。弥生時代の武器形青銅器鑄型の鋒部から溝口にかけての破片で、近くの集落で使用されていたことは間違いない。当遺跡においては弥生時代の遺構は殆ど検出していないが、今後の調査によって集落等が確認される可能性がある。土製品は4・6号土坑等から出土した。古墳時代のものと考えられるが、数があるため当地において何らかの祭祀具として使用されたと考えられる。円形銅製品は、中世に祭祀で使用されたと考えられる。円形銅製品の詳細についてはⅢ章を参照いただきたい。

以上のように、土製品、円形銅製品共に何らかの祭祀に使用されたと推定される。粘土採掘の際の祭祀か、すぐ南を流れる諸岡川に関する水辺の祭祀かは不明であるが、同じ場所において、異なる時期に祭祀行為が行われたことは興味深い。

粘土採掘坑の時期は、小形丸底埴や土製品から考えて古墳時代、陶磁器小片や円形銅製品から考えて中世と考えられる。春日市内においては、下大荒遺跡でも粘土採掘坑が調査されており、ここでは弥生時代～古代にかけての長い間粘土が採掘された可能性がある。このことから比恵尻遺跡においても長期間断続的に粘土の採掘場所として利用された可能性が推測できる。なお、粘土採掘坑は当調査地の東側まで延びているようである。

比恵尻遺跡は発見されたばかりの遺跡であり、今後遺跡の範囲や性格が明らかになるはずである。今後の発掘調査、確認調査において究明しなくてはならない課題が多い遺跡である。

圖 版



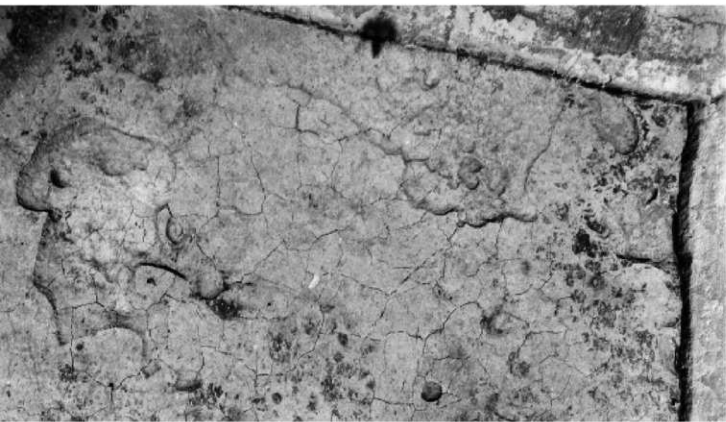
(1) 比恵尻遺跡全景（北西から）



(2) 比恵尻遺跡全景



(1) 1·2·4·5·6号土坑



(2) 3·7号土坑

(1)
3・8号土坑

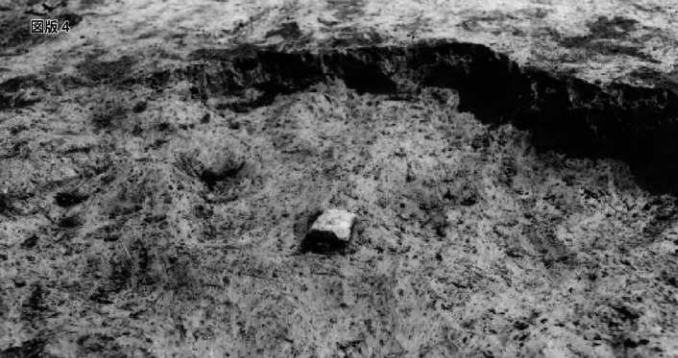


(2)
1号土坑断面土層（北西から）



(3)
1号土坑（南西から）





(1) 2号土坑鑄型出土狀態



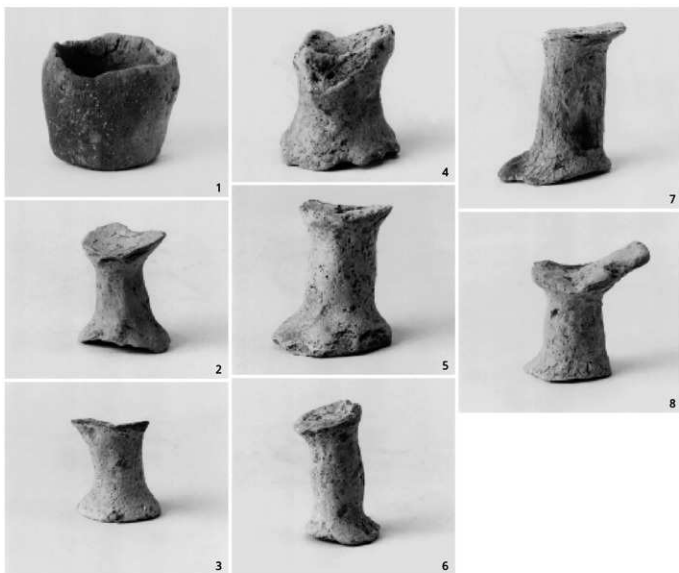
(2) 3号土坑內形銅製品出土狀態



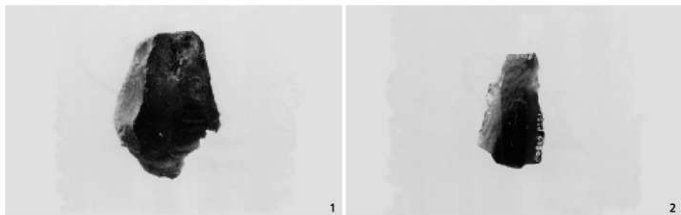
(3) 4号土坑土製品出土狀態



(1) 土器



(2) 土製品



(1) 石器



(2) 青銅器鑄型



(3) 円形銅製品

報告書抄録

ふりがな	ひえじりいせき							
書名	比恵尻遺跡							
副書名	福岡県春日市桜ヶ丘所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	春日市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第60集							
編著者名	井上義也							
編集機関	春日市教育委員会							
所在地	〒816-0804 福岡県春日市原町3丁目1番地5 TEL.092-584-1111							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひえじりいせき 比恵尻遺跡	福岡県春日市 桜ヶ丘5丁目 1番地	40218		33° 32' 41"	130° 26' 57"	2009.06.24 2009.07.10	120.7	共同住宅 建設に伴 う緊急発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
比恵尻遺跡	生産遺跡	弥生 古墳 中世	土坑	8基	弥生土器 土師器 須恵器 土製品 石器 青銅器鋳型 1点 円形銅製品 1点	粘土探掘坑と考えら れる土坑を抽出した 新発見の遺跡。 土坑からは、青銅器 鋳型や円形銅製品が 出土。		
要約	春日市の北端部に位置する遺跡で、平成20年度の試掘調査によって新たに発見された。粘土探掘坑8基を中心とする弥生時代～中世にかけての遺跡であるが、出土遺物は小片で磨滅したものが多く、流れ込みによるものと思われる。注目される遺物として青銅器鋳型や円形銅製品がある。青銅器鋳型は弥生時代の武器形青銅器の鋒部と溝口部分であり、当遺跡及び近接地で青銅器生産が行われた可能性がある。円形銅製品は中国上海に同種のもので出土しており、厭勝銭等と称される祭祀具や護符とされるものである。古墳時代の土製品も複数出土していることから、当地では祭祀場であったのかもしれない。比恵尻遺跡は新発見の遺跡であり、性格は不明な点が多い。今後の調査に期待、課題が残る。							

比 恵 尻 遺 跡

春日市文化財調査報告書

第60集

平成23年 3月31日

発 行 春日市教育委員会
福岡県春日市原町3丁目1番地5

印 刷 株式会社 昭和堂 九州支店
福岡県福岡市博多区東比恵 4- 2- 10